Short ショートコメント ★★★★

ミュート・ウィットネス
デジタルリマスター版

1995 年／イギリス、ロシア、ドイツ映画
配給：エクストリームフィルム／98 分

2025（令和 7）年 8 月 21 日鑑賞	テアトル梅田

Data ２０２５－７７

監督・脚本：アンソニー・ウォラー
出演：マリナ・スディナ／フェイ・リプリー／オレグ・ヤンコフスキー／エヴァン・リチャーズ／アレック・ギネス

みどころ

「90 年代サスペンス・スリラーの中でも　ひときわ衝撃的。」な映画を鑑賞。私は、「名匠『ヒッチコック』『デ・パルマ』の後継者に相応しいアンソニー・ウォラー」監督も、主演女優も全く知らなかったが、「逃げきれない恐怖ー幻の傑作が 30 年ぶりに甦るー。」と言われると、こりゃ必見！

ロシアのスタジオでの映画撮影風景から始まる本作は、“スナッフフィルム”（娯楽用途に流通させる目的で行われた実際の殺人の様子を撮影した映像作品を指す俗語。スナッフビデオ、スナッフムービー、殺人フィルム、殺人ビデオともいう。）の撮影風景に入ると、がぜんサスペンス調に！

本作最大のポイントは、女主人公のビリーが声を出すことのできないハンディキャップを持つことだ。オードリー・ヘップバーン主演の『暗くなるまで待って』（67 年）のヒロインや、今年の甲子園で有名になった生まれつき左手指が欠損しているハンディキャップを持つ岐阜県立岐阜商業の横山温大選手と同じように、本作でもビリーはハンディキャップをたくましく乗り越えていくので、その姿に注目！

その他、本作はクローズアップ撮影や小道具の効果的な使い方等々見どころいっぱいだから、「逃げきれない恐怖」を味わいつつ、90 年代サスペンス・スリラーの醍醐味をしっかり楽しみたい。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

◆私はさまざまな種類の株主優待券を有効に活用している。映画関係では、株式会社テアトルの株主優待券を活用してテアトル梅田によく通っている。ここは最近、名称を「シネリーブル梅田」から「テアトル梅田」に変更した、4 つのスクリーンを持つ劇場だが、いわゆる名画座系だから、私にとって好都合。しかも、時々1～2 週間限定で昔の映画を上映しているから、そこには見逃せない名作もある。1995 年に公開された本作はまさにその 1 本だ。

チラシには「90 年代サスペンス・スリラーの中でも　ひときわ衝撃的。」の見出しが躍り、「名匠『ヒッチコック』『デ・パルマ』の後継者に相応しい、アンソニー・ウォラー。」、「逃げ切れない恐怖ー幻の傑作が 30 年ぶりに甦るー」の見出しも！これらを読めば、こりゃ必見！

◆本作のヒロイン（＝主演女優）は、ロシアの人気女優だというマリナ・スディナ。

私は、ロシア人女優は『戦争と平和』全 4 部作（67 年）（第一部（210 分）、完結編（177 分））にナターシャ役として出演したリュドミラ・サベーリエワしか知らないが、今から 30 年前の 1995 年当時には、ロシア（モスクワ）を撮影現場として、ロシア人とアメリカ人が入り交じり、そしてまた、英語とロシア語が入り交じったこんな面白いサスペンス映画を作っていたことにビックリ！これなら、アンソニー・ウォラー監督が「第 2 のヒッチコック！」と書かれ、本作が「世界の映画作家たちが偏愛する《カルト的》傑作サスペンス・スリラー」と称されたことに納得！

そんな本作の introduction には次のとおり書かれている。すなわち

監督は『ファングルフ／月と心臓』(1997年)などで知られ、ヒッチコックやデ・パルマの後継者に相応しいと名高いアンソニー・ウォラー。イーライ・ロス監督が『サンクスギビング』の製作の際にもインスピレーションを受けたと発言している。出演はヒロインにロシアの人気女優マリナ・スディナ。共演は『ノスタルジア』などの名優オレグ・ヤンコフスキーほか。『スター・ウォーズ』などの英国演劇界の重鎮、アレック・ギネスが特別出演。

◆本作のストーリーは次のとおりだ。

Story　特殊メイクアップアーティストのビリーは、姉の恋人が監督する映画撮影のためにモスクワのスタジオを訪れていた。撮影後、忘れ物をしたビリーは館内へ戻ったが、施錠されてしまい閉じ込められてしまう。声を出すことのできないハンディキャップを持つビリーは助けを求めスタジオ内を彷徨う。そこでは密かに同じ撮影チームのスタッフによるポルノ映画の撮影が行われていた――と思った瞬間、女優の胸にナイフが突き立てられる。行われていたのはなんとスナッフフィルムの撮影だったのだ。そして彼女の地獄のような一夜が始まった……

本作最大のポイントは、ヒロインのビリー（マリナ・スディナ）が声を出すことのできないハンディキャップを持っていること。オードリー・ヘップバー主演の『暗くなるまで待って』（67 年）は、盲目のヒロインが電気を消してしまうことによって、目が見えない

ハンディキャップをハンディキャップでなくしてしまっていた。また、2025 年の夏の甲子園大会では、生まれつき左手指が欠損している岐阜県立岐阜商業の横山温大選手が、そんなハンディキャップを乗り越えて大活躍する姿が大きく報道されていた。しかして、本作に見るビリーのハンディキャップの克服ぶりはそれ以上だから、本作では何よりもそれに注目！他方、彼女との手話が通じる相手が姉のカレン（フェイ・リプリー）のみで、カレンの恋人で映画監督のアンディ（エヴァン・リチャーズ）が良家のボンボンであるところが、本作を少しコメディタッチにしているので、それにも注目！

本作はアンディが監督を務めている、あるホラー映画の撮影風景から始まるが、主演女優がイマイチなことや、製作スタッフにロシア人が多いこともあって殺人シーンがうまく進まずトラブル続き。そこで仕方なくアンディ監督は、「このシーンだけは！」と割り切って再度現場を動かしたが、午後 6 時になると、ロシア人スタッフは“仕事終了”となってしまったから、アレレ、アレレ。そして、なるほど、なるほど。

◆あなたは「スナッフフィルム（Snuff film）」の意味を知ってる？Wikipedia によると、これは「娯楽用途に流通させる目的で行われた実際の殺人の様子を撮影した映像作品を指す俗語。スナッフビデオ、スナッフムービー、殺人フィルム、殺人ビデオともいう。」と解説されているが、寡聞にして私はこれを知らなかった。しかして、本作の観客はスタジオ内に閉じ込められてしまったビリーと共にある“スナッフフィルム”の撮影現場に立ち会うことができるのでラッキー！

ビリーの仕事は特殊メイクアップアーティスト。冒頭に見る姉の恋人アンディによる映画撮影風景で、彼女はキビキビとした動きを見せていたから、まさにその道のプロだ。し

たがって、素人の私の目には本物の殺人か、それともスナップフィルム撮影かの区別は容易にわからないけれども、ビリーの目を通せばそれは明確！したがって、ビリーはとにかくその撮影現場から逃げ、警察にコトの真相を説明しなければならないが、残念ながらビリーは声を出すことのできないハンディキャップを持っていたから、大変だ。

現場に駆けつけてきた警察官に対して、無事逃げおおしたビリーと、何とか現場に駆けつけてきた姉のカレン及び恋人のアンディは、懸命にスナップフィルムの撮影ではなく本物の撮影だと説明したが・・・。

◆サスペンスものでは、ちょっとした小道具がストーリー展開に大きな決定的な役割を果たすことが多い。例えば、オードリー・ヘップバーン主演の『シャレード』（63 年）はメチャ面白いサスペンス映画だったが、同作では「切手」がその役割を果たしていた。それと同じように、本作では 1 枚のディスクが重要な小道具となり、それを巡ってロシア側はスナップフィルムの撮影スタッフや殺し屋、そしてロシア当局者、さらには死神と称する黒幕まで登場。他方、アメリカ側はラルセン刑事（オレグ・ヤンコフスキー）が登場し、闇部隊の戦いから国家的規模の戦い（？）まで、さまざまな戦いが描かれていく。

なお、クローズアップ撮影を得意とする監督は世界に多いが、本作のアンソニー・ウォラー監督もその 1 人。サスペンス劇にはそれがお似合いだし、効果音とマッチすればより強調されるので、本作でもそれに注目！また、テレビドラマの『水戸黄門』では、女忍者「かげろうお銀」「疾風のお絹」に扮する女優・由美かおるの入浴シーンが毎回のお楽しみとされ、通算 716 回の出演で、計 200 回以上の入浴シーンが流されたそうだからすごい。しかして、アンソニー・ウォラー監督は本作でも、ビリーの入浴シーンを何ともすばらしいタイミングで提供してくれているので、それもお楽しみに。さらに、その入浴シーンでは印象的な水滴のクローズアップ撮影にも注目！

◆『ゴードファーザー』3 部作（72 年、74 年、90 年）では暗殺シーンが何度も登場したが、とりわけ印象的だったのはマイケル（アル・パチーノ）の花嫁のイタリアでの車の爆破シーン。これは花嫁が車に乗り込みエンジンをかけると爆発する仕組みだったようだ。それに対して、本作ラストは、カラシニコフと称される世界一有名な自動小銃 AK-47 を持つ多くの男たちに囲まれたスタジオ内での大活劇（ドタバタ劇？）が、ディスクの発見により“完了”するものの、その後あっと驚く車の爆破シーンが登場するので、それに注目！その車に乗り込んだのはラルセン刑事。それを見送るのはビリーやカレンたちだが、さて本作の結末は？

2025（令和 7）年 8 月 22 日記